

吉川英梨

3年前、警察小説の先駆者である小説家の今野敏さんと対談したことがありました。今野さんは拙著、新東京水上警察シリーズ第1作目『波動』を読んだ、こんな感想をくださいました。

「面白かったけど、よく書いてるよね。海の小説は流行らないんだよ。僕も先輩作家からそれ聞いて、やめちゃった」

海上保安協会の宮野直昭常務から「吉川さんに海保の小説も書いてほしい!」と依頼を受けたのは、その3カ月後くらいだったと思います。私はその時、大御所作家の「海の小説は流行らない」という言葉を、一瞬たりとも思い出すことはありませんでした(笑)。

「なにそれ超おもしろそう! 絶対書きます!!」

そして、2020年9月、吉川が初めて書いた海保小説『海蝶』が無事発売になりました。

東日本大震災を扱うことの後ろめたさもありましたが、取材先でお会いした被災者の方に「ぜひ書いてください、忘れて

『海蝶』の出版はゴールではなくスタート

ほしくないですから」と後押しされ、無事完成にこぎつけました。

発売前後はインタビューの他、篠田麻里子さんと川原山由香さんとの鼎談、ラジオ出演、海上保安庁長官表敬訪問とてんこもり。これほどに方々からお声がかかったのも『海蝶』に感動してくださった関係各所のみなさんのご尽力のおかげです。

また、『海蝶』の帯の文言を書いていた佐藤雄二元長官や海上保安協会の石川裕己会長の暗躍(!?)で国土交通省の方々にも本を手にとっていただけたようです。

お名前は出せないのですが、とある政治家の方にも「感動した!」とお声かけいただき、編集者とエージェントを連れて海上保安庁幹部の方の付き添いのもと議員会館へ足を運んだこともありました。

噂では、現役総理大臣の手にも『海蝶』が渡ったとか渡っていないとか……!?

一方で、海のことをよく知らない一般読者の感想を見ますと、専門用語の多さと海上保安

筆者(中央)が奥島高弘長官(右)を表敬した際の一枚



庁の組織図の複雑さから「難しい」、という指摘もいただきました。

この時初めて私は、今野敏さんの言葉を思い出したのです。

「海の小説は流行らない」
未だ警察小説であっても「難しい」「ハードルが高い」と考える読者や作家が多数います。

そんな中で、そもそも海と船の知識がないと理解が難しい『海保小説』をどう一般読者に

浸透させるのか。どこを工夫すれば読者のハードルを下げられるか。どう描写すれば読者にすんなりとイメージさせられるのか……。

『海蝶』を書いたことで、多くの課題が浮かび上がってきました。『海蝶』を出版したらゴールだと思っていたのですが、実は私はスタート地点に立ったばかりだったのです。

これまで『海保小説』という

言葉は出版業界にはありませんでした。どうやら私が初めて使ったようです。いまのところ海保小説のシリーズを持っている作家はほかにいません。私ひとりです。現在、『海蝶2』の執筆に取りかかっていますが、主人公の忍海愛も相変わらず海上保安庁でたったひとりの女性潜水士として、現場で奮闘しています。開拓者としての忍海愛の姿を描きながら、「海の小説は流行らない」というジンクスがある出版業界の荒波を私自身がどう泳ぎ切るのか……。私の挑戦もまだ始まったばかりです。

さて、これにて『海蝶ノート』は連載終了となります。

10月からは日刊ゲンダイにて『海の教場』の連載がスタートします。舞鶴の海上保安学校を舞台にした愛と成長と涙の物語です。

『感染捜査』も好評につきシリーズ化が決定しております。今後とも『海保小説』の開拓と発展のため、吉川が海上保安庁のいたるところに出没するかと思いますが、その際はどうぞご協力をお願いします。

長い間連載にお付き合いいただき、ありがとうございました。(おわり)

新ジャンル『海保小説』の開拓と発展のため、ご協力をお願いします